

『アトリエー199X/202X』作／村野玲子

登場人物

女1

女2

男

※劇中で使用するコンパネは、一枚は裏に抜けられるよう（でも客にはわからないよう）穴をつくること。

※上演した梅ヶ丘 BOX を舞台空間として想定しているが、別空間で上演の際には、空間の事情にあわせて動きなど改編を行ってもよい。

1

202X年。

都内の私立大学、校舎地下にある倉庫を改造したアトリエ。

壁も床も黒く覆われ、真つ黒な空間。

空間の一方には客席のような段差が数段。一角にはベニヤで仕切られたブースのようなスペースがある。

天窓から薄明かり。

女1が現れる。薄暗い中、歩き回る。

男が現れ、蛍光灯をつける。

足を踏み入れ、空間を眺め、歩き回る。

壁に触れたり、床を押ししたり、飛び跳ねたり。

女1、男の振る舞いに笑ったり。

男 変わっていないな。

女1 変わっていない。

男 やったな、ここで。

女1 やったね、ここで。

男 客席もブースもそのまま。

女1 壁も床も天井のバトンもそのまま。

男 青春の一ページ。

女1 二ページ、三ページ、四ページ。

男、ブレイカーを上げ、ブースに入り照明をつける。

女1 また倉庫になってたんだって？

男 大学のな。長机とか、椅子とか、詰まっていた。(明かりつく) ついた。

女1 シーリング。

男 懐かしいな。シーリング。

女1 もう発語する機会ないよね、離れると。

男、舞台スペースに降りてきて、蛍光灯を消す。

演劇的な空間になる。

男、全身で明かりを浴びる。

男 気持ちいい。

女1 はは。

男 何。

女1 根っからの役者。

男、発声をする。

男 大きい声出す機会もない。

男 (大声で) 馬をくれ、王国をやる。

女1 リチャード三世。

男 かつこよかったな、アル・パチーノ。Looking for Richard' 台詞入れるのに苦しんでるパチーノがさ、(パチーノ) シット、こんなに苦しんでる俳優を見て、映画としては面白いだろうな。かつこいいんだ。

女1 あったね、そんな場面。

男 (ヤス) 銀ちゃん。

女1 唐突。

男 銀ちゃん、オレ、階段落ちやりますから。オレ、自分の手で女も仕事も勝ち取りますから。(体の向きを変え) ヤス、のぼせあがんじゃねえ。(蹴りつける)

女1 蒲田行進曲。

男 かつこよかったな、

男 風間杜夫。／女1 平田満。

男 あ、そっち？

女1 蒲田はヤスの芝居だよ。――
男 そんな話もずいぶんしたな。
女1 弁当屋で安い総菜買って、ビール買って。
男 講堂前で、終電まで。
女1 朝までの日もあったよ。
男 夜中に雨降ってきて、段ボールかぶってしのいだ。
女1 何の色気もない。
男 (サロメ) そなたの唇に、口づけするよ、ヨカナン。
女1 サロメ？
男 色気がないなんていうからさ。
女1 そういう話じゃないでしょ。
男 (ヘロデ) あの月は裸だ。素っ裸だぞ。雲が服を着せようと追いかけておる。
女1 面白いよね、オスカー・ワイルド。
男 幸福な王子。
女1 あれ、目のサファイアを若い貧しい劇作家にあげるんだよね。
男 いつの時代も、若い劇作家は飢えて貧しい。
女1 まったくだ。飢えた黒パンばかりかじっても、私は夢見る、名声を。
男 チェーホフ、かもめ、ニーナ。
女1 名声がほしいわけじゃない。ちゃんとした作品がつくれればそれでいいだけなんだけどね。
男 名声がないと、食えない。
女1 大変だよ、芸術で食べていくのって。まるで錬金術。
男 続けてるんだって？ 劇作家
女1 まあ、細々。食べていくので精一杯。
男 尊敬するよ、俺には出来なかった。

女2、現れている。

男、歩き回る。

男 ここも建て替えちゃうなんて。
女1 もう母校とは言えない。
男 もうちよっと粘ってほしかったな、学生自治会。せっかく頑張ってる居座ってたんだから。
女1 無理でしょ。自治会なんて、うちらが入学した頃だって風前の灯だった。
男 そこから約二十年。よく持ったと言えるか。
女1 解放区だったんでしょ？ 地下フロア一帯。

男 六十年代の終わり頃な。そのまま自治を勝ち取った。

女1 プロが入り込んでるって噂もあったよね。私たちのいた頃。

男 プロ？

女1 活動のプロ。革マルのさらにもっと上、みたいな。

男 そういう噂もあったけどな。実態はない。留年を重ねた学生や、就活浪人してるやつらの溜り場になってただけ。夏に流しそうめんやったり、冬に闇鍋やったり。かりそのめ自由から卒業できない、どうしようもない連中だよ。

女1 詳しいね。

男 職員だから。

女1 待遇いい？ 大学職員。

男 まあな。独り身には、十分すぎる。

女1 独り身？

男 女房がいたが、逃げられた。

女1 どうして。

男 わからない。俺といっても、つまらなかったのかもな。自分の人生を送りたいって。

女1 :

女1、偏頭痛の兆し。片側のこめかみをおさえ、身をやややすくめる。

男は気づかない。

男 自治会か。――

女1 もはやレガシーだね。――

男 自治会というものは、正確にはもうない。今は学生会。

女1 何それ。生徒会みたい。

男 自治って言葉が学生にうけないんだってさ。だから自らとった。そして大学公認になった。中身も今は全然違う。御用組合みたいなもんだ。

女1 何それ。

男 知らん。二十一世紀の流れだ。

女1 どういうつもりなんだろ。

男 自治の返上。自由からの逃走。

女1 エーリツヒ・フロム。流行ったね。ほにやららからの自由は、ほにやららへの自由とは異なる。

男 わけわかんないのに読んだな。

女1 そう？ 面白かったよ。

男 俺は抽象的なことは苦手だからさ。

女2、女1に並んで座る。
女1、寒気が走る。

男 寒い？
女1 (天窓) 開いてるからかも。
男 閉めるか。

男、天窓の下に何かを発見し、拾い上げる。紙。

男 ː
女1 何？
男 台本。
女1 台本？
男 信じられない。残ってるか、ふつう。

男、女1に紙を渡す。

女1 手書き。きつたない、読めない。
男 書いた本人が。
女1 私？ 私の字？
男 処女作だよ、君の。
女1 私の？
男 覚えてない？

蛍光灯明かりになる。

2

199X年。

男と女2、アトリエに物資を運び込んでいる。

男 以上か。
女2 以上。
男 階段、厳しいな。
女2 腿ばんばん、腰ギシギシ。文系の労働量じゃないっつもの。(手洗いへ)

男 (女2に) 俺も。俺たちは二十世紀の終わり、アトリエをつくった。(女1に) くれは覚えてる？

女1 もちろん。このこと。でも正確にいうと、作ったわけじゃない。

男 もともとあったアトリエを復活させた。

女1 小劇場ブームのレガシー。

女2 (声のみ) 約束守ってよね。

男 約束？

女2 (声のみ) カレー。激辛チキン、奢るって言ったじゃん。

男 もちろん、食い放題だ。(女1に) 七十年代の先輩方が作って、卒業して放置した。その後、自治会の物置になって忘れ去られてた。

女1 どこ行ったんだろうね、その先輩たち。

男 さあ、気がすんだんじゃないか、俺みたいに。

女2 (戻り) ラッシーもね。

男 何杯でも。

女2 あー疲れた。

男 俺も疲れた。

女1 私？ サイズ違いすぎない？

男 多少、戯画化してる。かわいいだろ。――

女2 限界。腰もんで。

男 はいよ。(揉む)

女2 強い。

男 こんなもん？

女2 うう、よきよき。

女1 わがまま。

男 自覚した？

女1 む。

女2 すごい量だったね、自治会のゴミ。

男 ゴミじゃない。チラシやら立て看やら、学生運動のレガシーだよ。

女2 でも捨てちゃうじゃん。

男 いらないうって言うからいいんだろ。

女2 あいつらケチだよ。少しくらい手伝ってくればいいのに。

男 しょうがないよ、責任もって勝手にやる、が使用にあたっての唯一の条件。

女2 にしてもさ。廃材置き場埋まるほどだよ？ バイト代もらってもいい。(箱馬を)

これ、どこに置く？

男 もう復活？

女2 ちゃっっちゃと終わらす。

女1 せっかち。
男 (女1に) ねえ、ほんとに。(女2に、奥の壁際を示し) あっちにまとめるか。
女2 あいよ。(立ち) 私ひとり?
男 はいはい、働きますよ。
女1 勝手だね。何か反省する。
男 誘ったのは俺だから。(女2に) この箱馬と箱イスもそっちに。
女2 はいよ。

男と女2、バケツリレーを始める。
女1も参加する。

三人のバケツリレーで箱馬と箱イスを壁際に重ねていく。
続けて数枚のコンパネ板を一か所に重ねて置き、機材の入った箱と工具をブース前にまとめ、客席用イスを楽屋に運ぶ。
それらの作業をしながら、適宜手を止めつつ、以下の会話。

男 (女1に) 俺らが最初に話した場所、覚えてる?
女1 もちろん。
女1・女2 演劇博物館。(女2、動き止まる)
女1 の喫煙所。/男 (女2に) どうした。
女2 今日までだ。寺山修司の世界。
女1 火ありませんか、ついでに一本恵んでくれませんかって。
男 (女1に) 話したかったんだよ。(女2に) 行ってないの?
女2 レポート忙しかったから。
男 四月早々にレポート?
女2 文学部の教授って書かせたがるの。
女1 名刺代わりに文章書かせる。ああ、寺山、私の寺山。
女1 はまったな、寺山。
男 行って来いよ。すぐそこなんだから。
女2 そうだけど、終わらせてから。二人でやった方が早いでしょ。
女1 ほんとに三人だけだ。
男 通ったな、演劇博物館。(二人にかかると)
女1 世界有数の演劇蔵書を誇る。
女2 入る度にテンション上がる。
女1 気の利いた企画展やるんだよね。歴代幸四郎の回顧展やるかと思えば、次は別役実の世界。
女2 古今東西演劇資料の充実ぶり。

女1 この大学入って、ここだけは全宇宙に誇れると思った。
女2 でも楽しいキャンパスライフの大半をあそこで過ごす学生、そういないよね。私はレポート目的だったけど。
男 居場所がなかったんだよ。どこで、誰といっても、しつくりこなかった。俺が俺でないような気がした。
女1 ある意味、わがまま。
男 君と会ってからだ、俺のキャンパスライフが始まったのは。
女1 よく言うよ。
女2 (機材見て) よくこんなの譲ってくれたね。
女1 本当。
男 ブタビな。
女2 舞台美術研究会。
男 新しい機材に買い替えますからどうぞって。金あるよな。
女1 普通に外注受けてたもんね。
男 いいよな、手に職。
女2 全員が全員、プロになるわけじゃないでしょ。
男 でも近いところに行ける。舞台監督のエリちゃんてのがいてさ。コクーンのパラシの後に打ち上げいって、野田秀樹と大竹しのぶと同じテーブルになったって。
女2 へえ。羨ましい?
男 別に。ガチガチに緊張して何話したか覚えてないって。俺だったらべらべらしゃべっちゃう。野田さん、あんたのラスコーリニコフ像に俺は反対だ。
女2 (客席用イスを) これそっちにまとめれば。
女1 演説はまた改めて。
男 へいへい。

三人、バケツリレーで客席用イスを別室の楽屋にしまっていく。
女2が運び出すので、そのたびに室内からは姿が見えなくなる。

女1 この椅子、どうしたんだっけ。
男 スペファイがなくなるだろ。倉庫からもらってきたんだ。
女2 (現れ) スペースファイブ。略語禁止。言葉が乱れる。
女1 六号館の上だっけ。
男 そう。あそこも歴史あったんだぞ。つかこうへいが稽古に来て、怒鳴って垂木投げたときの穴が壁に開いてるって。
女1 見たの?
男 噂だけど。てあとも演クラも、みんな新しい学生会館に行っちゃうなんてな。

女2 (現れ) 演劇倶楽部。だから、こうしていろんなおこぼれもらえてるんじゃない。
男 そうだけど。

女1 よくもまあ、いろんなもん拾い集めて。

男 リヤカー引いて回ったな、学内中の廃材置き場。

女2 あの講堂裏の、何？ おどろおどろしい、アトリエ？

男 木霊？ あそこはエセアングラ。稽古で未だに全身痙攣とかやってる。

女2 痙攣。

男 カミナリっていうんだって。緊張と弛緩が目的っていうが、どうだか。気はいい人
たちだけど、方法としては怪しいもんだ。

女2 (現れ) 以上？

男・女1 以上。

男、ブースに上がる。

男 古いフェーダーだな。

女2 わかる？

男 たぶん。これか。

シーリングが点く。

女1、蛍光灯を消す。演劇的な空間になる。

男 おお。

女2 演劇だ。

男 俺たちのアトリエ。

女2 無限なる自由。

男と女2、二人、握手する。女1、その様子を見る。

男 やったな。

女2 うん。

男 よろしく頼むぞ、座付作家。

女2 あんたは何すんの？

男 俺？ 俺は、いろいろだよ。でも、まずは本だ。いい本があれば、いい芝居も、ま
ずい芝居もできる。まずはいい本を書いてくれ。

女2 がんばります。ではまず、

男 何。

女2 寺山、ちよつと覗いてきていい？
男 もちろん。
女2 よっしゃ。(行く)
男 インスピレーションもらってこいよ。
女2 (声のみ) おうよ。
女1 はまってんな。
男 古本屋で片っ端からエッセイ買ってたな。
女1 順路でしょ。
男 若者としては、順路だな。
女1 私に初めて自由の価値を教えてくださいな。
男 そんなの、寺山だけじゃないだろ。
女1 私にとつての初めては寺山。
男 初めての男か。
女1 あんただっているでしょ。
男 俺は多いぞ、初めての男、初めての女。(資料棚の本を示し) 唐、別役、もちろん寺山、つかこうへい、坂手洋二、川村毅、竹内銃一郎、永井愛、渡辺えり子、あと、あのきれいな、
女1 如月小春。
男 シェイクスピア、チャーホフ、ソフオクレス、ピンター、ブレヒト、アーサー・ミラー、俺たちのオスカー・ワイルド、モリエール、ベケット、エミール・ゾラ。マイ本棚ベストセレクション。これ全部稽古したい。
女1 ほんと、入る学部間違えたよね。
男 間違えたんじゃない、落ちたの、文学部は。
女1 結局、どこだっけ。
男 社会科学部。
女1 ああ、二分の一夜間。
男 そうやってバカにする。いいんだぜ、午前中寝てられるし。
女1 浪人とか留年とか、ツワモノ多いイメージ。
男 確かに年齢不詳な人、多かったな。でもその分、自由だった。変なグループもなかったし。
女1 それは大学のいいところだよな。嫌な奴とつきあわなくていい。
男 ある意味勝手にしろって感じだけどな。でもその結果、こうしてここができた。
女1 おめでとう。
男 ありがとう。

二人、ハイタッチする。

女2、戻ってくる。
手にはポカリのペットボトル二本。

男 どうした。
女2 終わった。
男 え、もう？
女1 そうだった、そうだった。／女2 今日撤収作業があるから閉館早いつて。聞いてねえよ。(ペットボトルを男に投げ)やる。
男 さんきゅ。
女2 やけポカリだ。(飲む)
男 (女1に)飲む？
女1 いい。
女2 で？
男 ん？
女2 どうすんの、これから。
男 ああ。
女2 考えてないの？
男 考えてるよ。
女2 巻き込んだのあなた、巻き込まれたの私。大学三年にもなって貴重な時間費やしてんの。責任とつてよね。
男 うん。
女2 次の展開。座長。
男 座長。
女2 そうでしょ。劇団のトップなんだから。
男 座長、座長。
女1 嬉しそうに。
女2 座長はこれからどうしたいですか。
男 劇団会議だな。
女2 何でもいいから。
男 まず、何だな。
女1 劇団名。
男 劇団名。それは実は、もうある。
女2 えっ。／女1 そうだっけ。
男 大学に登録した名前はこれだ。(資料棚からサークル紹介誌を取り出す)じゃん。

二人、冊子をのぞき込む。

女1 あった。

女2 自由舞台？／ 女1 自由舞台。

男 復活させた、この大学に眠る小劇場のレガシーを。

女1 凶々しい。／ 女2 凶々しい

女2 にもほどがある。あんたわかってんの？ 世界の鈴木忠志だよ？ 天下の別役実

だよ？ 偉大すぎる先輩方が血の汗流して作り上げたあの自由舞台を名乗るってか？ ああ？ どの誰が見逃してくれると思ってるの。

男 じゃあなんだ？自由の由を田んぼの田で自田（ジデン）舞台にして、突き抜けれない僕らです、みたいな謙虚な姿勢をアピールした方がよかったか？

女2 なんかもっとあるでしょ。現代風とか、この世紀末を現すとか。

男 自由舞台の何が悪い。

女2 おこがましいっつってんの。

男 それだけ気合入ってるってことだよ。いいか、俺は三年かけて星の数ほどあると言われているこの大学中の劇団を全て回った。演劇のメッカといわれるこの大学で、どんな稽古が行われ、どんな作品が上演されているのかをこの目で、この体で体験したかった。結論からいう。全て中途半端だ。俺が納得できる演劇はどこにもなかった。そしていま四年。本来なら就活にいそしんでいるときに、新たな劇団を旗揚げするという暴挙に出た。なぜかわかるか。これが俺の、就職活動なんだよ。

女1 うわあ。

女2 言っちゃった。

男 いいんだ。言いたいんだ、俺は。鈴木さんに、別役さんに。俺があんたたちの遺産、確かに引き受けますよって。いや、俺だけじゃない。少なくともこの大学の演劇文化に、確実に息づいてますよって。稽古はどこもスズキメソッドだ。下半身を落とすって、低い声で発声して、忍者のように動く。下半身こそが肉体の基礎。やってみるぞ。ほら。早く。

女1・女2、男に促され、立って股を割る。

男 骨盤の上に上半身を乗せるんだ。鼻から息を吸え。そして吐く。吐くときに声を乗せる。

三人、発声をする。

女2 （体勢がきつくて）無理。

男 甘いな。それじゃ舞台に立てないぞ。

女2 は？
男 公演を打つ。
女2 は？え？ / 女1 出た。
男 公演を打つ。
女2 私たち、二人ですけど。
男 なんとかするんだ。
女2 えっと。
女1 この人の癖。
男・女1 言ってから考える。
女2 無理無理無理、無理っしょ、二人じゃ。私、出ないし。
男 だからこそだ。公演を打つという名目があれば、堂々と助けてと言える。手伝ってと声をかけられる。
女2 そうだけど。
男 そうやって、連れてくるんだ、人を、人材を。いいか、演劇は人だ。場所があつて、人がいれば、あとはどうにでもなる。
女1 だから、まず場所。
女2 つつてもさ、何するの？ 演目。それによって、どんな人を集めるかも変わってくるっしょ。
男 そのために君がいる。
女2 まさか。
女1 そのまさか。
男 よろしくな、座付作家。
女2 待つて待つて待つて。いきなり？
男 さっきの握手、忘れたとは言わせない。
女1 悪魔の契約。
女2 無理無理無理、絶対無理、自信ないって。
男 大丈夫。
女2 書いたことないから。
男・女1 なんとかなる。
女1 これだ。 / 女2 ええー。
女2 無理だつて。
女1 と言いながら、内心やりたい。――
男 さんざん書かされてるだろ、レポート。
女2 あれは義務。
男 じゃあ義務だ。やれ。
女2 ええー。そんな。いいじゃん、最初だし、無難にシェイクスピアとかやろうよ。

男 二人で？

女2 う、じゃあピンター。

男 女優やるの？

女2 やだ、絶対やだ。

男 だろ？

女1・女2 人前で何かするの大嫌い。

男 じゃあ選択肢は一つだ。台本を書け。

女2 ええー。

女1 がんばれ。

女2 (大の字になり) やだ。できない。

女1 頑固だね。

男 じゃ他に何かできるか？ 衣装？ 制作？ 音響？

女2 どれもできない。

男 ほれみる。大丈夫だ、書ける。歌舞伎やらバレエやら、授業で色んな舞台観ただろ？

女2 観た。

男 レポートで色んな戯曲も評論も読んだろ？

女2 読んだ。読みまくった。

男 な。君は演劇の知識、教養を持っている。あとは実践あるのみ。

女2 自信ない。

女1 誰にでも最初はある。

女2 書きたいよ。書いてみたい。でもやり方もルールもわからない。

男 手伝うからさ。

女1、偏頭痛がぶり返してくる。

こめかみに手を当て、身をすくめる。

女2 手伝う？

男 アシスタントでもなんでも。そうだ、こういうのはどうだ。エチュードで場面を立ち上げていく。

女2 エチュードって、即興？

男 ある設定のもと、ある役として、即興でやりとりしていくんだ。やがて自然に一場面がつくれる。それを元に台本を起こせばいい。一人でうなって考えるより簡単だ。

女2 確かに。

男 書くか？

女2 うん。

女1の偏頭痛、強まる。

女2 やってみる。

男 よし決まり。焦らなくていい。まず中身だ。題材はいくらでも転がってる。例えば、このことをネタにしてもいい。

女2 ネタ？ 何かあるの？

男 なぜ自治会があっさり手放したと思う？ ここはな、いわくつきの場所なんだ。

女1、体勢を崩す。

男 (女1に) どうした。

女1 偏頭痛。気圧かな。

女2 いわくつき。

男 大丈夫か。

女2 いわくつきね。

女1、さらに体勢を崩す。

3

202X年。

女1 :

男 横になる？

女1 大丈夫。ちよつと座ってれば。

女1、座る。

女2は物思いにふける。男、ゆっくり歩き回る。

女1、頭痛収まり、ゆっくり息を吐く。

男 おさまった？

女1 多少。

男 なくなっちゃうんだな、ここ。なくなんなくちやいけないのかな。

女1 切ないね。

男 失恋。違うな。離婚。もつと違う。
女1 何が。

男 この感覚。焼かれるような、ぎゅっとなるさ。
女1 消えていく、青春の一ページ。
男 二ページ、三ページ、四ページ。入り浸ってたな、朝から晩まで。授業なんて行かずに。

女1 引っ越す勢いだっただね。

男 俺、このアトリエと心中するつもりでいたから。

女1 大学の施設だよ。夜十時にはロックアウトされる。

男 それでもさ。初めて自由を手に入れた。

女1 気になった。

男 嬉しかったんだよ。

女1 それはわかる。自由帳。

男 自由帳。いつも持ってた。

女1 あれ開くと、解放される実感がわいてくるんだよね。ここは自由だ、何を書いても許されるんだ。字でも、絵でも、叶わない夢でも、

男 呪いの言葉でも。

女1 親に叱られたりしたときね。書いたな。書いて、書いて、書きまくった。でも使い切ったことない。

男 そうなの。

女1 終わっちゃうのが怖くて。せいぜい、いって半分くらいまで。真ん中を超えた当たりで、次のノートにいつちゅう。

男 新しい自由を手に入れる。

女1 そう。古い自由を堪能しきる前に。

男 飽きっぽい。

女1 でもここは好きだった。好きっていうと違うかな。いるだけで、意識がどんどん広がって。自分の体は確かにこのままなんだよ。でも意識が、こう。

女1、立ち、体を広げる。

男 わかるよ。

女1 無限ってこんな感じなのかな。

男 かもね。

女1 書けなくてさ、新作。アイデアが全然浮かばない。何が書きたいのかもわからない。

男 ライターズブロック。

女1 そんなかつこいいものかな。ここに来れば、何かわかるかと思って。

男 ……この噂、覚えてる？
女1 ああ、地下アトリエの女？
男 そう。君の処女作のモチーフ。
女2 一号館地下のアトリエでは、舞台装置の箱に閉じ込められた女が、夜な夜な台本を書いている。箱の隙間から書かれた台本が、一枚、二枚、三枚……。だが最後まで書ききることはない。なぜなら紙はとうに尽きてしまったから。

女2、資料棚から紙束を取り出し、中を見る。

女1 ……
男 なんて箱なんか入ったんだろ。
女1 うーん。
男 修行かな。
女1 さあ
男 何の舞台装置だったんだろうな。
女1 安部公房とか。
男 箱男か。ありや小説だろ。君の台本では、確か、
女2 サロメ。
女1 ……
男 預言者ヨカナンを閉じ込める牢か。
女1 ひっくり返すとヘロデ王の玉座。ちゃんとしたものをつくる予算ないから、箱で代用するって設定。便利な抽象舞台。
男 見立て。
女1 見立て、それは金のない小劇場の救いの女神。箱がベッドに、箱が棺に。
男 箱がちやぶ台に、箱が恋人に。箱が赤ん坊に。
女1 それは無理だ。
男 想像力に限界はない。箱がいくつかあればどんな芝居のどんな場面もだいたいできる。

男、箱イスを並べ出す。

あたかも立方体の箱のように、柱状に四本。架空の箱ができる。

女1 何。
男 エチュードしよう。最後のエチュード。
女1 やだ。
男 一回だけ。

女1 人前で何かやるの苦手だっていつてるでしょ。
男 誰もいないだろ。
女1 それでも。
男 昔さんざんやったじゃん。
女1 あれは、芝居つくるためだったから。
男 芝居な。
女1 そう。

男、女2の手から、紙束を取る。

4

199X年。

男 (女2に) おまえそこな。(女1) おまえそこ。早く。

女2、男に指示され、箱イスでできた架空の箱のそばに行く。

女1 何。

男 エチュードだよ。エチュードで地下アトリエの女をモチーフにした台本をつくる。

女1 えー。／女2 おー。ご協力たまわります。

男 (女2に) 設定。

女2 とある大学のとある学生劇団アトリエ。あなたはそこの演出家、私は座付作家。時代は七十年代初頭、この大学にも学生運動の嵐は激しく吹き荒れていた。ここまですべてOK？

男 OK。／女1 へーい。

女2 大学に入ったばかりのある演劇青年A(男を示す)は、学内にある劇団をめぐる修行したが、どこも生ぬるいと断じ、自ら新しい劇団を旗揚げすることにした。活動場所として一号館地下にある倉庫(ここを示す)の使用許可を得て、仲間(自分を示す)と共にアトリエへと改造した。日々の活動にいそしむ、ある日のこと。

男 OK、じゃ始めるぞ。第一場、稽古。

男、手を叩く。

女2 おまえの唇にくちづけするよ、ヨカナン。
女1 サロメ？
男 さつきそう言ったろ。
女1 そうだけど、一人でサロメ？
女2 くちづけするよ、ヨカナン。
男 サロメ様、それ以上そいつに寄らないでください、サロメ様(倒れこみ)サロメ様。
(立ち)隊長、若い兵隊が自殺しました。何、おいしい男をなくした。(架空の箱に入り)寄るな、呪われた娘。
女2 くちづけする、くちづけするよ、ねえ、無理よやっぱり。
男 いいんだよ、君はサロメだけやってれば。
女2 演出家でしょ？
男 演出家が、出演もするんだ。
女2 作家がなぜ演出家と二人でサロメの稽古を？
男 それは、二人しかないからだ。
女2 (エチュードを)たんま。なんで二人なの？
男 そこは作家の考えどころだ。なぜだ？
女2 (考える)／ 女1 無茶振り。
女2 出払ってた。
男 なぜだ？
女2 (考える)／ 女1 真面目だね。
女2 学生運動で。
男 なぜ二人は行かなかった？
女2 (考える)／ 女1 がんばれー。
女2 街頭デモではなく、演劇を重視した。
男 よし、そうしよう。学生運動華やかなりし頃、その大勢に背を向けるがごとく、演劇の稽古にいそしむ二人の男女がいた。社会変革の術は演劇にあり、革命の演劇だ。
男・女1 いんじゃね？
女2 でも作家が演じるって。
男 それは、あー、
女1 リアリティを追及するため。人を殺す芝居を書くために人を殺す必要はない。でも様々な体験を寄せ集めて、想像する必要がある。実際に体を動かして再現することで、変化を生理的に体得する。その感覚を筆に乗せる。
男 だそうだ。
女2 何が。／女1 省くな。
男 リアリティを得るためだよ。ええと、その、頭で考えるんじゃない、実際に体を動かす方がより真実に近づける。

女2 ふうん。

女1 まあそういうこと。

男 でだ。その稽古をしている最中に、活動家たちがやってくる。

女2 えっ。／女1 たちって。

男、ペットボトル二本を持ち、それぞれを活動家として扱う。

男 (活動家として) おい、おまえら。相も変わらず演劇なんていう軟弱なことをして

いやがるな。書など捨てる。街へ繰り出せ。安保反対、ベトナム戦争反対。造反有理、革命無罪。

(Aとして) 何の用だ。俺たちはいま稽古中だ。俺たちにとっての闘いは演劇において行われる。邪魔をするな。

女2 邪魔をするな。

男 (活動家がAに対して呼びかける) おい、ああ、おお、(女2に) 名前は？(自分、つまりAを示し) 彼の。

女2 あ、じゃあ、桑野晋八。

男 (活動家として) 桑野、桑野晋八。(桑野として) なな、なぜ俺の名前を。(活動家として) ふっふっふ、桑野くん。君に用があつてきた。(桑野として) なんだ。何の用だ。

女2 (活動家を) 私やろうか？

男 いや、いい、おまえは自分の役に専念しろ。(活動家として) 桑野。(桑野として) なんだ。(活動家として) 晋八。(桑野として) そうだ。

女2 しづらいわ。

女1 待てい。

女1、立ちほだかる。

男、ペットボトル二本を、手下活動家として女1の足元に置く。

男(桑野) 改めて女1を見て怯える。

女2は男の怯えを見て、真似て怯える。

男 委員長。

女2 委員長？

女1 (委員長として) 山本小次郎を知っているか。

男 (桑野として) 山本小次郎？ さあ。

女2 …(明らかに山本を知っている)

女1 文学部の学生だ。桑野晋八という学生に誘われて、とあるセクトの集会に出たと言

っている。

男 一つの話です？

女1 昨年の秋。1970年11月4日に、法政大学で行われた反革マルの決起集会だ。

男 覚えてないな。

女1 山本はあくまでも桑野に誘われて参加したと言っている。

男 そもそも、山本って誰ですか。

女1 忘れたか。この劇団員だ。

男 幽霊団員もいるので。

女1 本当に幽霊になってほしいか。

男 そんなわけないでしょ。知ってます、山本、知ってますよ。試験前にノート貸してくれるいい奴です。名前だけ借りたんですよ、サークル成立させるために。やめてくださいよ、乱暴なことは。

女1 先月の全学街頭デモ、覚えているか。

男 知りません。行ってないんで。

女1 我々の予定していたルートが公安にリークされていた。行く先々で機動隊に阻まれ、我々は退却せざるを得なかった。何者かが我々の動きをリークした。その何者かを探している。その可能性が高いのが山本と、こういうわけだ。なぜか向こうの集会に出た後に、こっちの集会に出る頻度が上がってる。――

男 :

女1 山本なんじゃないのか？ リークした犯人は。お前の指示なんじゃないのか？

男、逃げようとする。

が、捕らえられ、押し戻され、箱馬で四角く区切られたエリアに倒れこむ
(という芝居をしていることを表現する)

男 と、まず俺がここで箱に入れられると。

女2 (活動家としてペットボトルを男の周囲に置き) 屈強な男たちが、こう立ちほだか
つてる。

女1 面倒だ、箱ごと連れていけ。

男 (活動家として) へい。と男たちが箱を持ち上げようとしたそのとき、

女2、いったん距離を取り、駆け込む。

女2 待ってください。

女1 何だ君は。

男 (女2に) 名前は？

女2 小原ミユキ。

男 (桑野として) ミユキ。

女2 それは大切な舞台装置です。持っていかれては困ります。

男 男たちは乱暴に装置を置く。どすん。(置く動作)

女2 乱暴です。これは私たちがキャップフェーや建築現場でアルバイトして必死にためたお金でつくった装置です。謝ってください。謝ってください。私たちの精神に、謝ってください。

男 (立ち位置を変え、桑野として) やめろ、ミユキ。(ペットボトルの活動家として) なんだと、女。

女2 なんて差別的な言い方。口では自由だ解放だ言いながら、結局前近代的な封建主義のままなのよ、あなたたちの考え方の根底は。

男 (活動家として) なんだと。(桑野として) おい、ミユキ、やめろ。(活動家として) こいつも連れていこう。(もう一人の活動家として) おまえも来い。(桑野として) やめろ、ミユキは関係ない。やめろ、やめろんだ。

女2 ねえ、やっぱ無理だよ、二人じゃ。

女1 実は三人だけど。

男 あと少し。

女2 少しじゃないよ、ここからポイントなんだから。

女1 一号館地下のアトリエでは舞台装置の箱に閉じ込められた女が、夜な夜な台本を書いている。彼女がなぜ箱に入ることを選んだか。

女2 ここ乗り越えないと、演劇にならない。

5

202X年。

男 夢中だったな。

女1 必死だったよ。台本書けなんていうんだもん。

男 誰だって初めてはある。シェイクスピアも、チエーホフも。

女1 並べるなって。

男 俺はできると信じてたよ。いや確信だな。

女1 思い込みっていうの。

男 俺の唯一の武器だ。

女1 たいそうな諸刃の剣。

女2、自由帳を開き、考え込んでいる。
男、女1と向かい合って立つ。

男 俺、委員長な。あんたミュキ。
女1 またやるの。

男 続き、続き。(ペットボトルを並べ)下っ端活動家その1、その2。(委員長として)
この女をひつとらえい。(下っ端として)へい。

女1 ええと、(ミュキとして)やめて。

男 活動家たちに連行されていきそうになる桑野とミュキ。だがそこで桑野が一念発起。(桑野として)あんたたちのやってることに疑問をもったから、あっちの集会に行っただよ。山本の動機は知らない。少なくとも俺はそうだ。

女1 桑野くん。

男 (委員長として)どういう疑問だ。(桑野として)何月何日、どこどこ大学で同胞だれだれが殺害された。何日、報復でだれだれを殺害した。何日、だれだれを拉致、殺害。あんたたちがやってることは内ゲバばかりだ。単なる殺し合いだ。これのどこが革命といえる。俺たちは誰も殺さない。殺す芝居はする。だがそれはよりよい生を知るためだ。

女2、言葉が浮かんでくる。

男・女2 演劇は誰も殺さない。だから俺たちは演劇で革命を行う。(委員長として)どうやって。(桑野として)認識に革命を起こす。我々の舞台を目撃することで、観客は人間としての新たな可能性を追求するようになる。疑心暗鬼に駆られて人殺しにいそしむ暇などない、

女2の言葉、明確になる。男の言葉は弱まっていくな。

男・女2 なぜなら他にみずみずしい出会いがたくさんあることを我々の舞台を通じて知るからだ。他者とどう出会い、受け入れるか、あるいは拒否するか。(ここまでに男の声は止む)あなた方は拒否ばかりしている。抱きあおう。愛し合おう。世界平和を希求するなら、やることは内ゲバじゃない。目の前の相手と心の底からつながることだ。それが敵であっても、味方であっても。敵味方の原理を受け入れちゃいけない。それはどこかの誰かによってつくられた線引きだ。能動的に生きる主体なら、そんなものに踊らされちゃだめだ。

男 (委員長として)君の言いたいことはわかるし、拝聴したいと思う。悪いが一緒に

来てもらう。(桑野として) 行くしかないのか、くそう。(行こうとする)

女1 (ミユキとして) 待って。いつ戻る？

男 …

女1 稽古、一人じゃできないんだけど。エチュードで場面つくっていいこうっていったの、あんたでしょ。

男 (桑野として) おまえが自信ないって騒ぐから。

女1 自信ないつつつてんの。台本なんて書いたことないんだから。(男を一回転させ、委員長に変えて) 悪いですけど、この人連れていかなくてもええですか？ 私たち、旗揚げ公演のための台本づくりで忙しいんです。

男 知ったことか。

女1 私からすれば、あんたたちの事情も知ったことかです。――

男 (逆回転し桑野に戻り) 俺がいなくても大丈夫だ。

女1 何無責任なこといってんの。巻き込んだのあなた、巻き込まれたの私。貴重な時間費やしてんの。ちゃんと責任とってよね。

男 戻ってくるから。

女1 本当に？

男 本当に。(活動家として) 本当に、だ？ 甘ったれが。書くなんて作業は一人でするもんだろ。

女1 そうですけど何か。仕方ないでしょ、やったことないんだから。

男 誰だって初めてはある。

女1 あっても自信はないんです。

男 まずやれ。行動しろ。やってもないのに文句ばかり言うな。大切なのは実践だ。アルトーも言うとおりに、演劇は実践の芸術だろう。違うか。

女1 詳しい？

男 文学部だからな。

女1 見たことない。何年生？

男 忘れた。行くぞ。

女1 文学部だったらなおさらよ。あんた、芸術をないがしろにするのね。それって人間をバカにするのと同義よ。自由を見下すのと同義よ。

男 違う。

女1 違わない。さっき、私たちの装置をこの人たちが乱暴に扱ったわよね。まだその謝罪を受けてないのを思い出した。謝って。私たちの精神に謝って。

男 申し訳ないことをした。(ペットボトル手下1) 委員長。(手下2) 委員長。

女1 さすが委員長、器が違う。あんたたちも謝って。(扉の前に立ちふさがり) じゃな
いと出さない。

男 (手下1) おい、女。(手下2) いいから、ここは。(手下1、舌打ち) 仕方ねえな。

女1 (ペットボトル二本の頭を下げる) すみませんでした。
よくできました。

男、ペットボトル二本を連れられ、行こうとする。
それを女1引き止める。

女1 待って。必ず帰ってきて。私、台本書いてる。一人で書いてるから。待って。(架空の箱の中を示し)ここ。この中で書いてる。紙と、懐中電灯と、鉛筆と。待って。蓋。箱の蓋、閉めていって。釘で。絶対あかないように。

男 (活動家として) なんだと? (桑野として) ミユキ。
女1 帰ってきて開けないと、死んじゃうよ。わかる?(男を回転させ、委員長に変えて) 帰らせないと、五体満足ですぐに帰らせないと、あんたたちは全然関係のない女学生を殺すことになるのよ。いい?(逆回転させて、桑野にして) 打って。打ちつけて。早く。

女1、架空の箱の中に沈み込む。

6

女2、コンパネ板を運び始める。

女2 手伝ってよ。
男 ああ。

二人、板と工具を一か所にまとめていく。

女1 何してんの。

男 箱だよ。覚えてない? 自分から作ろうって言いだして。

女1 ああ。

男 ミユキが箱に入った感覚を知りたいって言ってさ。実際に入ってみようって。

女2は次の段取りを考えている。

男、金槌を持ち、釘で打ってつなぎあわせていく。

女1、板を押さえて手伝う。

女2 あ、ちよっと上の生協いってくる。やってて。(行く)

男と女1、協力して箱を作りながら。

男 新作が書けないって、どのくらい？

女1 十年。

男 長いな。

女1 もはや劇作家とは言えない。

男 そんなことないよ。書いてない時間も、書くことの一部。

女1 復活できるかな。

男 それは君次第。

女1、自由帳を開く。かつての自分の字。

女1 きつたない字。

男 思いが先走ったんだろ。若さゆえの熱量だよ。

女1 (書かれている言葉を読む) 演劇は誰も殺さない。だから俺たちは演劇で革命を行う。どうやって。認識に革命を起こす。我々の舞台を目撃することで、観客は人間としての新たな可能性を追求するようになる。…信じてたんだな、演劇の可能性。

男 今は？

女1 どうかな。現実にかけて、逃げてるだけかも。

男 自由からの逃走。

女1 自由を手に入れたはずなのに、自由であることの不安にかけて、不自由に逃げ込む。

男 自由という牢獄。

女1 せつかく色んなことから解放されたのに、自由を使いこなせない。自治権を返上しちゃう。この大学の学生みたいに。

男 勝ち取った権利なのにな。

女1 ここもなくなっちゃう。無限なる自由。

男 :

ここまでに、コンパネによる箱は完成している。

女2、買い物袋をさげて戻ってくる。

女2 お、早いね。よっ、マルチタレント。

男 まあな。

女2 買ってきた。非常食と、簡易トイレ。

男 そんなもんよく生協にあったな。

女2 防災グッズ、充実してた。東京もいつ地震起きてもおかしくないからね。あとは、懐中電灯。(工具の中から取り出す)

女1 …

女2 ミユキは桑野を待って箱に入った。そして、箱の中で台本を完成させた。ここがブックボックス。具体的にどう書いたか。もっと生理的につかみたいんだよね。こ
う、身体的に。悪いね、付き合わせて。

男 座付作家と座長の関係だろ。

女2 じゃいいか。

男 おう。

女2 では、と。

女2、食糧と簡易トイレ、箱馬を箱の中に入れ、自らも入ろうとする。

男 もう？

女2 あ、ちよつと待って。

女2、鉛筆と自由帳を持つ。

女2 では、いってまいります。

男 健闘を祈る。

女2が入ろうとすると、女1、箱の前に立つ。

二人、目が合う。

女2 何ですか。

女1 教えて。どうして箱に入るの。

女2 書きたいからですよ。

女1 入ったってしょうがない。想像力で補うところ。

女2 想像の、もっと先に行きたい。どいてください。

女1 …

女2 あなた、誰ですか？

女1 …

女2 人生を賭けてやらないことに、何の意味があるんですか？

女1 …

女1、箱の前を空ける。

女2、箱の中に入り、自由帳を開く。

女2

(ミユキとして) 桑野くん。打って、打ちつけて。早く。

男、ふたを閉めて、釘を打つ。

女1、激しい偏頭痛が起き、やがておさまっていく。

男は女1を見ている。

女1

一号館地下のアトリエでは、舞台装置の箱に閉じ込められた女が、夜な夜な台本を書いている。箱の隙間から書かれた台本が、一枚、二枚、三枚…。

箱の隙間から、白い紙が一枚ずつ吐き出されていく。

女1

ミユキは箱の中で台本を書いた。書きながら桑野を待った。時間の感覚がやがてなくなる。数分が数時間にも思える。ミユキは不自由さを忘れるためにも書いた。書いて、書いて、書き続けた。ふと思う。もし桑野が帰らなかつたら？可能性は十分にある。ミユキは途端に息苦しさに襲われた。(女2、箱の内側を叩く) 出して、出して、出して。蓋を叩き、壁をむしり、のどを枯らして声を出した。だが誰の何の反応もない。ミユキはここに自分がいることを伝えるために、台本が書かれたノートを破り、箱の隙間から差し出した。吐き出されていく静かな悲鳴。一枚、二枚、三枚…。(紙、止まる) やがて紙は尽き、疲れ切った彼女は少し眠った。どれくらい経ったかわからない。目を覚ました彼女は、まだ自分が暗闇の中にいることを知った。絶望した。泣き、叫び、体を打ち付け、大声で男の名を呼んだ。(女1、アトリエの扉を叩く) 桑野くん、桑野くん、桑野くん。

アトリエの扉が開き、女1の姿が消える。

男、ボールで釘を抜く。

男、箱の蓋を開く。女2ではなく、女1が自由帳を開いてそこにいる。

男、落ちている紙を拾い集める。

男 戻ってきた桑野が慌てて箱を開けると、ミユキは意識を失っていた。暴れているうちに頭を強く打ちつけたようだった。内側から叩き続けた両手は真っ青にはれ上がり、爪もはがれていた。ミユキは二度と目覚めないまま、衰弱して亡くなった。……書けそうか、新作。

女1 この続きを書く。今度は桑野の物語。ミユキを失った桑野はどう演劇を信じ、もがきながらも続けていくか。

男 楽しみだな。

女1 見に来て……ほしかったな。(男はすでに亡くなっていた)

男 ああ。ごめんな。思ったより早かったよ。

女1 もう会えないんだね。アトリエにも、君にも。

男、拾い集めた紙を女1に渡す。

男 処女作だよ、君の。

女1 うん。

男、扉に向かう。

女1 後で行く。だいぶ先になると思うけど。

男 おう。

女1 そなたの唇に、口づけするよ、ヨカナン。

男 あの月は裸だ。素っ裸だぞ。雲が服を着せようと追いかけておる。

女1 ……

男 おつかれ。

男、扉から出ていく。

女1、空間を歩き回り、やがて足を止める。

女1 おつかれ。

女1、出ていく。

溶暗。

(了)